

## マナスルへの道③

## 第二次登山隊とサマ集落問題

村山雅美

マナスル初登頂50周年を契機に、それまでの道のりを振り返ってみる3回目の企画は、第二次隊のサマでの出来事に焦点を当ててみました。

一次隊の成果を踏まえ、「必ず登る」決意で日本を発った隊員たちは、村人たちに阻止され、結局ベースキャンプにもたどり着けませんでした。

一、二次隊に参加し、1955年秋の三次隊の先遣隊メンバーとしてもサマに向かった村山雅美さんに、江本嘉伸会報委員が話を聞き、まとめてくれました。

88歳の高齢、体調を考えて長時間の語りの負担を避けるため、マナスルの現場で発生した細かな事実は近著『地の果てに挑む マナスル・南極・北極』(05年6月 東京新聞出版局) から引用しています。

サマでの問題は、53年の一次隊の時に起きていた。前年の踏査隊が神聖な山「カンブンゲン(地元住民たちのマナスルの別称)」に登ったため病気が流行した、などの悪い噂が村人たちの間に広がっていた。登頂できずに下山した時、ラルキヤという村でシェルパと住民の乱闘事件が起きた。

「前歯を折られて喚く村民。傍らで泣き叫ぶ尼僧。隊員の仲裁では埒が明かず、この地域の裁判権を持つサマの僧院のラマ僧と交渉の結果、負傷者は手当てして感謝料四十ルピーを支払い、ひとまず解決した。

このとき全財産をはたいてでも現地住民とラマ僧を懐柔し、ボヤの残り火をとことん始末しておけば、翌年のいわゆるサマ事件は起

きなかったのでは、涉外担当の私はいまもなお反省している」(前掲書)

54年の二次隊では、ブリガンダキの谷に入るや、いやな噂が耳に入った。早魃、天然痘の流行、雪崩でゴンパ(僧院)がつぶされ、尼僧が死んだ事故など、すべて昨年日本隊が登ったせいだというのだ。荷物を運んでくれているポーターたちも、あちこちで何かをささやきながら、私たちを見るようになった。不安と脅えがその目つきにあらわれていた。

本隊のメンバーは手前のナムルーに留まって、交渉の様子を待つこととした。望みは持つてはいたが、不調となる公算も大きかったのだ。私と通訳のディリー、サーダーのガルツェンが先頭に、山崎

と二人のシエルパを中間に配し、谷口、松沢が最後尾というかたちでポーターの隊列を組んだ。

サマの手前のロー集落にさしかると、村人たちの雰囲気は想像以上に険悪だった。私が仲間と先行すると、あちこちで私たちを監視する厳しい視線を感じた。人々はそのうち石を投げつけてきた。口々に叫んでいる。ガルトゥエンに聞くと「日本人を殺せ」「まだ早い」などと言いつ合っているらしい。

サマの手前1時間ほどのところにマナスルを見上げる芝地がある。ここで泊まる予定だった。手に手に斧を持った30人ほどの村民が立ちほだかるのをなだめつつ、なんとかテントを張る。夕食時間になっても隊のキッチンで働くドルジ少年がいない。なんと村人たちにつかまって、木に縛り付けられているとわかった。サマ出身なのに日本隊で働くとは何事か、と村人の怒りがあったのだ。なんとか彼を引き取ることはできたが、厄介はそれからだった。

4月6日、サーダー、通訳とともに涉外担当の私がサマのラマ僧に会いにいった。200人の村人に取り囲まれての交渉は厳しいも



サマ集落はかたく戸を閉じていた〔「マナスル」から〕

のだった。

「赤い絨毯の席に着いたラマ僧兄弟の前に村人の頭ダ・テンジンほか数人の住民代表と我々が円陣に胡座をかいて会談が始まった。敵意に満ちた空気を弟ラマ僧と、テンジンが煽り、住民たちは「不作や疫病の原因は日本隊にあり」と、前年ラルキヤ集落での日本隊のシエルパと住民が乱闘した際の恨みつらみを口々に言い立て、日本隊の退去をラマ僧に訴えた」

私の英語は「デイリー」によってまづネパール語に訳され、次いでガルトゥエンを通してチベット語に訳されて相手方に伝えられる。その繰り返しだから時間もかかった。

「いらだたしい交渉ははてしなく続く。両手をぼつと広げたり、はだけた胸を拳で叩くといったチベット人特有の大きな身ぶりで観衆は興奮の極に達し、私やサーダーの首を切る身ぶりも飛び出して大きな歓声上がる」

やがて、兄のラマ僧が大声で一喝すると、静まり返った。

「ネパール政府に許されても、サマ領域への侵入については実力をもつて阻止する」

ヘッド・ラマはこう言い放って席を立った。二次隊がマナスル山城を放棄する惨めな集団になり果てた瞬間だった。

それでもできることはしなければならぬ。スッパに会ってお願しようとして涉外係の私はガルトゥエン、デイリーを連れて二日間シャルコーラの峡谷に沿って歩き、チヨコン集落に向かった。スッパとの会見にはサマでの交渉相手だったラマ僧3名も加わった。私はサマでの事件を説明し、ネパール政府の許可をもらっているマナスルに登らせてほしい、と頼んだ。

結果は「災厄を呼ぶマナスルは今年は不可。ガネッシュ・ヒマールかヒマール・チュリに限って認

めよう」というものだった。

万事休した。あとできることは「政府の許可証が地方ではなぜ無効なのか」との不満をネパールの外務大臣あてに書いて、飛脚に託すことだけだった。

サマの教訓は、おそらく日本人が現地事情を十分理解しようとなかったことにあるのだろう。ネパール政府のお墨付きを得たからといって、それが黄門様の印籠のように現地に住む人々すべてに通じるわけではない、という基本的なことを誰もわかっていなかった。やむなく隊はガネッシュ・ヒマールに転進したのだった。マナスルに登りに行ったのだから、別の山に意欲的に向かうことはできなかった。

戦後初めてヒマラヤに向かう登山隊ということで、私たちがわかっていないことがある。サマの

外務省のサーティファイケーションがあるのに、サマの人たちがその通り動いてくれない、というのでこちらとしては大いに不満だった。あとから考えれば、イギリスやフランスなどはヒマラヤ登山のそれまでの積み重ねがあるから、いろいろな対処の方法を知ってい

たが、日本の登山隊はそういう経験を持っていない。日本の外務省にあてたネパール政府の正式な文書があるから、大丈夫と思ひ込んでいたところがある。

たとえば、スッパと呼ばれる郡の長とラマとの関係をよく理解していなかった。第一次隊の時から勿論シェルパたちはその事情を知っていた、と思う。しかし、それなのに言いたくも言えなかったようだ。言葉の問題もあるが、初めてヒマラヤに来る日本隊に言っ

ても仕方がない、と考えたのかもされない。日本人が現地の風習、村人たちの心を理解していなかったことが第1の問題だが、その点については、サーダーのギャルツェンはじめシェルパの側にも多少問題があった。

二次隊の失敗を乗り越えてマナスルは三次隊を出すことになった。もうミスは許されない。あらためてネパール政府と交渉して登山許可と「現地住民の友好関係確立」の約束を取り付けた。そして、三

次隊の先遣隊として、55年9月から3カ月、私と小原勝郎(立教大OB)、橋本誠二(北大OB)の3人が派遣された。

前年までの経験にこりて、今度はサーダーを更迭した。新サーダーはガルツェン・ノルブと言ひ、私たちは彼にサマでの問題について詳しく教え、村のリーダーたちの性格なども伝えた。ガルツェン・ノルブは誠実に役割を果たしてくれた。

サマに行つて、もう話はいっていると思つていたら、おき火にまだ火がついているような状態だった。それを僧院への寄進などのかたちでなだめ、ついに解決となった。

先遣隊の仕事を終えて帰国した1955年暮れ、西堀栄三郎さんから電話があり、「南極観測を手伝え」と言われた。1957年から58年にかけて実施される「国際地球観測年(IGY)」で、日本も南極観測に参加しよう、という話だった。以後、第三次マナスル登山隊には参加せず、私の仕事はヒマラヤから極地に移った。

いま、マナスルの何年かを通し最も印象に残る情景は？ と聞

かれたら、それは初めて船で降り立ったカルカッタの町、その第一夜に目のあたりにした風景、匂いだ。牛の糞、小便の匂い、薪が燃える匂い。カトマンズもその意味で印象的な町だった。物乞いの人にも、まさに異文化との出会いだった。

サマで起きた問題は、いわば、その異文化との不慣れな出会いとも言えただろう。

(文責 江本嘉伸)



転進したガネッシュ主峰。手前は第2キャンプ(「マナスル」から)



1954年の第二次登山隊のメンバー(「マナスル」から)